

博士論文（要約）

論文題目 柳亭種彦の合巻研究

氏名 金美眞

〈目次〉

凡例	-----	ii
序論	-----	1
第一章 種彦の合巻と考証		
第一節 『骨董集ほりかひ』考	-----	6
第二節 古俳諧と『娘金平昔絵草紙』	-----	23
第三節 近世初期俗語・俗諺研究	-----	40
第二章 種彦の合巻と演劇		
第一節 『曾我太夫染』の古風と当世風	-----	58
— 注記の役割をめぐって —		
第二節 『女模様稲妻染』と大津絵の趣向	-----	75
— 三馬・京伝合巻との比較を通して —		
第三節 『鯨帯博多合三国』の創作技法	-----	90
— 「鯨帯」を手がかりに —		
第三章 『修紫田舎源氏』論		
第一節 『修紫田舎源氏』と『柳亭雑集』	-----	108
第二節 『修紫田舎源氏』の年立	-----	126
第三節 『修紫田舎源氏』の挿絵	-----	142
— 近世初期の絵入り版本との比較を通して —		
結論	-----	161
初出一覧	-----	164

〈本 文〉

博士論文の全文が、すでに出版されていて全文公表ができません。
出版情報は以下のとおりである。

金美眞『柳亭種彦の合巻の世界－過去を蘇らせる力「考証」－』（若草書房、2017年12月）ISBN 978-4-904271-17-9

〈参考文献〉

- 『柳亭翁雑録』下巻（東京都立中央図書館特別文庫室所蔵〈請求番号：加 10814〉）
- 『骨董集』（東京都立中央図書館特別文庫室所蔵本〈請求記号：加 10655〉）
- 『灯籠踊秋之花園』（東京都立中央図書館特別文庫室所蔵本〈請求記号：東 4753-57〉）
- 『雁金紺屋作早染』（東京大学総合図書館所蔵本〈請求記号：E24:942〉）
- 『娘金平昔絵草紙』（東京大学図書館所蔵本〈請求記号：E24:763〉）
- 『諺の通』（天理大学付属天理図書館所蔵〈請求記号：389 - イ 5〉）
- 『柳亭記』（国立国会図書館所蔵〈請求記号：辰—6〉）
- 『絵本答話鑑』（早稲田大学図書館所蔵〈請求記号：千 05 01764〉）
- 『吉原つね／＼草』（東北大学狩野文庫所蔵〈請求記号：4-12044-2〉）
- 『傾城盛衰記』（東京大学総合図書館所蔵〈請求記号：E24. 880〉）
- 『正本製』（早稲田大学図書館所蔵〈請求記号：へ 13_03091〉）
- 『曾我太夫染』（長野県上田市立図書館花月文庫所蔵〈請求番号：花 43—226〉）
- 『吃又平名画助刃』（早稲田大学図書館所蔵〈請求記号：へ 13_03027〉）
- 『女模様稲妻染』（東北大学付属図書館狩野文庫所蔵〈請求記号：狩 4-12648-2〉）
- 『濡燕子宿傘』（国立国会図書館所蔵〈請求記号：YD-古-6398〉）
- 『鯨帯博多合三国』（東京大学総合図書館所蔵〈請求番号：E24：788〉）
- 『新織博多縞入船』の辻番付（早稲田大学演劇博物館所蔵〈登録番号：口 22-00046-005〉）
- 『博多高麗名物噺』の辻番付（早稲田大学演劇博物館所蔵〈登録番号：口 22-00043-075〉）
- 『博多高麗名物噺』の絵本番付（早稲田大学演劇博物館所蔵〈登録番号：口 23-00001-0412〉）
- 『玉藻前御園公服』の絵本番付（早稲田大学演劇博物館所蔵〈登録番号：口 23-00001-0621〉）
- 『山開色深川』の辻番付（早稲田大学演劇博物館所蔵〈登録番号：口 22-00016-007〉）
- 『山開色深川』の役割番付（早稲田大学演劇博物館所蔵〈登録番号：口 24-00001-278〉）
- 歌川国貞画「蚩狩江戸ッ子揃／関三十郎」の大判錦絵（早稲田大学演劇博物館所蔵の〈作品番号：500-0104〉）
- 歌川豊国画「坂東三津五郎」の大判錦絵（早稲田大学演劇博物館所蔵〈作品番号：201-5973〉）
- 『修紫田舎源氏』四編の第二稿本（国立国会図書館〈請求記号：WA19-20〉）
- 『修紫田舎源氏』八編の第二稿本（『新編稀書複製会叢書』第45巻〈臨川書店、1991年〉）
- 『柳亭雑集』（東京都立中央図書館所蔵〈請求記号：加 10815・1～4〉）
- 『湖月抄』延宝元年版（東京大学国文学研究室所蔵〈請求記号：中古 31・8・8〉）
- 『雍州府志』（立命館大学図書館西園寺文庫所蔵〈資料番号：SB4385〉）

『脩紫田舎源氏』（東京大学総合図書館所蔵〈請求記号：E24.536〉）
『絵入源氏物語』（東京大学国文学研究室所蔵〈請求記号：中古31・8・3〉）
朝倉治彦校訂『柳亭種彦日記』（秋山書店、1979年）
木村三四吾氏編校『還魂紙料』（私家版、1982年）
『俚言集覧』自筆稿本版巻1～11（クレス出版、1992～1993年）
『日本古典文学大辞典』1巻～6巻（岩波書店、1983年～1985年）
『日本舞踊辞典』（東京堂出版、1977年）
『俳文学大辞典』（角川書店、1995年）
『歌舞伎事典』（平凡社、2000年）
『歌舞伎登場人物事典』（白水社、2010年）
『名歌名句大事典』（明治書院、2012年）
『近世列伝体小説史』下（春陽堂、1897年）
『新群書類従』第7（国書刊行会、1906年）
『源注余滴』（国書刊行会、1906年）
『海録』（国書刊行会、1915年）
『未刊随筆百種』第18巻（米山堂、1928年）
『日本名著全集』21（日本名著全集刊行会、1928年）
山口剛『脩紫田舎源氏』（日本名著全集第21巻、日本名著全集刊行会、1928年）
柳宗悦『初期大津絵』（工政会出版部、1929年）
松本隆信校訂『西鶴研究と資料』（国文学論叢1輯、1957年）
田中豊太郎編・柳宗悦監修『大津絵図録』（三彩社、1960年）
服部幸雄編『宝暦から明治へ一所作事の系譜』（国立劇場上演資料集第36、国立劇場、1969年）
『近世文藝叢刊』第1巻（般庵野間光辰先生華甲記念会、1969年）
『本居宣長全集第』4巻（筑摩書房、1969年）
宮田正信・鈴木勝忠校注『化政天保俳諧集』（古典俳諧文学大系16、集英社、1971年）
『歌舞伎評判記集成』第5巻（岩波書店、1974年）
『日本随筆大成』2期6巻（吉川弘文館、1974年）
『日本随筆大成』2期14巻（吉川弘文館、1974年）
『日本随筆大成』2期19巻（吉川弘文館、1975年）
大朝雄二『源氏物語正篇の研究』（桜楓社、1975年）
『日本随筆大成』1期15巻（吉川弘文館、1976年）
『近世人名録集成』第3巻（勉誠社、1976年）
『源氏物語古註釈大成』第6巻（日本図書センター、1978年）
『近松全集』第5巻（岩波書店、1986年）
中野三敏『近代蔵書印譜』2編（日本書誌学大系41・42、青裳堂書店、1986年）

吉田幸一『絵入本源氏物語考』上・中・下（日本書誌学大系 53 〈1〉～〈3〉、青裳堂書店、1987年）

『近松全集』第10巻（岩波書店、1989年）

『近世書目集』（日本古典文学会、1989年）

『日本随筆大成』1期2巻（吉川弘文館、1993年）

『日本随筆大成』1期4巻（吉川弘文館、1993年）

『日本随筆大成』1期13巻（吉川弘文館、1993年）

『国立劇場上演資料集』353（国立劇場調査養成部芸能調査室、1994年）

『歌舞伎台帳集成』第32巻（勉誠社、1994年）

鈴木重三『修紫田舎源氏』上・下（新日本古典文学大系 88・89、岩波書店、1995年）

『山東京傳全集』第16巻（ぺりかん社、1997年）

鈴木日出男『源氏物語ハンドブック』（三省堂、1998年）

『国立劇場上演資料集』426（国立劇場調査養成部芸能調査室、2000年）

佐藤至子『江戸の絵入小説—合巻の世界』（ぺりかん社、2001年）

梶原正昭ほか二人『曾我物語』（新編日本古典文学全集 53、小学館、2002年）

清水婦久子『源氏物語版本の研究』（和泉書店、2003年）

秋山虔の外三人校注『源氏物語』（新編日本古典文学全集・20～25、小学館、2004年）

曲亭馬琴著・徳田武校注『近世物之本江戸作者部類』（岩波書店、2014年）

関根正直「俚言集覧の編者」（『からすかご』六合館、1927年）

高野辰之「曾我太夫染」解説と翻刻（『近松歌舞伎狂言集』附録、六合館、1927年）。

鈴木重三「種彦資料断片」（『日本古書通信』第247号、日本古書通信社、1964年11月）

雲英末雄「古俳諧研究余滴—種彦旧蔵書入れ俳書（その一）」（『文芸と批評』2巻10号、1968年10月）

大朝雄二「作品構造の分析（源氏物語）—一年立をめぐる—」（『国文学』7、學燈社、1970年7月）

大朝雄二「〈源氏物語の主題・構造〉年立と構造」（『日本文学』源氏物語下、至文堂、1978年5月）

越智美登子「神野忠知・高井立志句集稿」（『滋賀大国文』16号、1978年12月）

鈴木重三「合巻の美術」（『絵本と浮世絵』美術出版社、1979年）

佐藤悟「柳亭種彦草双紙書目稿」（『近世文芸』38号、1983年5月）

内村和至「『修紫田舎源氏』論—その方法をめぐって—」（『明治大学大学院紀要』21集、1984年2月）

山本陽史「山東京伝の考証随筆と戯作」（『国語と国文学』63巻10号、1986年10月）

内村和至「『修紫田舎源氏』における考証趣味の検討」（『明治大学大学院紀要』25集、1988年2月）

古井戸秀夫「藤娘の成立」（『近世文芸』51号、1989年11月）

- 佐藤悟「考証随筆と戯作—柳亭種彦の古俳諧研究」(『俳諧史の新しい地平』論集近世文学4、勉誠社、1992年)
- 佐藤悟「合巻の構造—『面傀儡二面鏡』の「世界」と「趣向」」(『近世文学論叢』明治書院、1992年)
- 佐藤悟「源氏物語と近世文学」(『源氏物語講座第8 源氏物語の本文と受容』勉誠社、1992年)
- 北村孝一「俚言集覧の成立と増補過程」(『俚言集覧』自筆稿本版第11巻所収、クレス出版、1993年)
- 佐藤悟「柳亭種彦『骨董集ほりかひ』解題と影印」(『近世文学論輯』和泉書院、1993年)
- 佐藤悟「考証随筆の意味するもの—柳亭種彦と曲亭馬琴—」(『国語と国文学』70巻11号、1993年11月)
- 佐藤悟『柳亭種彦合巻集』「娘金平昔絵草紙」の解題(叢書江戸文庫三15、国書刊行会、1996年)
- 佐藤悟「俚言集覧」(本のはなし第33回・新日本古典文学大系月報97、岩波書店、2001年9月)
- 佐藤悟「『修紫田舎源氏』の挿絵」(『江戸文化とサブカルチャー』至文堂、2005年)
- 棚橋正博の外三人「早稲田大学所蔵合巻集覧稿35」(『近世文芸研究と評論』69号、2005年)
- 鵜飼伴子「毛剃九右衛門—海賊の野望—」(『四代目鶴屋南北論』風間書房、2005年)
- 渥美清太郎「系統別歌舞伎戯曲解題」下の一(『歌舞伎資料選書』11、日本芸術文化振興会、2011年)
- 佐藤至子「昔の芝居を今見るごとし—柳亭種彦の合巻における歌舞伎の再現」(『西鶴と浮世草子研究』5号・芸能、笠間書院、2011年)

〈論文の内容の要旨〉

本論文は、近世後期の絵入り小説を代表する柳亭種彦（以下、種彦と略す）の合巻の独自の創作態度を明らかにすることを目指したものである。そのため、彼が近世初期の風俗考証を行ったこと、浄瑠璃や歌舞伎など演劇に高い関心を持っていたことに着目し、彼の合巻を考察した。また種彦の代表作である『修紫田舎源氏』全三十八編（〈文政十二年～天保十三年刊行〉、三十九・四十編は初案稿本として伝わる、以下『田舎源氏』と略す）の『源氏物語』翻案態度にも注目した。各章の内容を簡略に記しておく。

第一章は、種彦が合巻を執筆する際、自ら考証した事柄を作中に取り入れる傾向があることに着目し、彼の考証随筆および雑記と合巻との関わりについて論じたものである。第一節では、京伝の『骨董集』を増補した種彦の『骨董集ほりかひ』の検討を通して、種彦が京伝の考証を再考証した際に見られた三つの特色、(1)新資料の利用により京伝とは異なる観点から考証を行ったこと、(2)一つの資料であっても刊年の異なる写本や版本を用いたこと、(3)京伝の考証の誤りを補訂する姿勢を保っていたことを明らかにした。また、『ほりかひ』「灯籠踊の古図」項の、灯籠躍の際に用いる置灯籠を被ると尾によって顔が見えなくなるという種彦の考証内容が、自身の合巻『灯籠踊 秋之花園』の発端に用いられていることを指摘した。第二節では、種彦が考証の資料として古俳諧をしばしば用いるという従来の指摘を、京伝、馬琴の考証との比較を通して、より明らかにした。また、俳諧における等類（先行の作品に作意や表現などが類似していること）や近世初期の俳人、神野忠知の俗称や彼の句に関する知識が、種彦の合巻『娘金平昔絵草紙』の全体構造に用いられていることを論じた。第三節では、種彦の自筆稿本『諺の通』の考察と、太田全斎編『俚言集覧』に引用された種彦の諸説の検討を通して、近世初期の俗語と俗諺に関する種彦の精密な研究の具体像を明らかにした。また、種彦の合巻『傾城盛衰記』には二十二の俗諺が取り入れられ、それらが筋の展開において重要な役割を果たしていることを指摘した。このように多数の俗諺を合巻の筋に絡ませることができたのは、種彦に近世初期の俗語・俗諺研究の蓄積があったからであると結論づけた。

第二章は、種彦の合巻における演劇趣味の表れ方について論じたものである。演劇趣味が強く表れている種彦の合巻には『正本製』全十二編（文化十二年～天保二年刊行）があるが、それ以外の彼の合巻をも視野に入れて考察を行った。第一節では、近松の狂

言本の古風を伝えるために創作された『曾我太夫染』^{そがたゆうぞめ}において、作中に施されている八つの注記が、古風を伝えつつ挿絵を当世風に描くことをも可能にする役割を果たしていることを指摘した。また、種彦が注記に示している、近松の狂言本に見える役者の役柄や扮装、鬘、近世初期の俗語・俗諺に関する説明から、本論文の第一章で述べた彼の考証趣味も見られた。第二節では、合巻の創作に大津絵の趣向を利用した作品である、種彦の『女模様稲妻染』^{おんなもよういなずまぞめ}、三馬の『吃又平名画助刃』^{どもまたへいめいがのすけだち}、京伝の『濡燕子宿傘』^{ぬれつぼめねぐらのからかさ}を比較し、三馬・京伝と異なる種彦合巻の演劇趣味の特徴について論じた。三馬と京伝は、大津絵から画題が抜け出る「大津絵絵抜け」を趣向として用いたのに対し、種彦は、敵討ちの場面に登場人物が大津絵の画題に扮して歌いながら踊るという、舞台における大津絵の所作事に擬えて描いたことを明らかにした。第三節では、『鯨帯博多合三国』^{くじらおひはかたとみくに}において、題名と序文に記されている「鯨帯」の持つ意味を考察した。『鯨帯博多合三国』は、浄瑠璃『博多小女郎波枕』^{はかたこじょうらなみまくら}の宗七と玄海灘右衛門が、歌舞伎『富岡恋山開』^{とみがおかこひのやまびらき}の玉屋新兵衛と出村屋新兵衛と同一人物であると設定していた。つまり、一人の登場人物が二つの顔を持つという構造になっていた。このようなそれぞれの登場人物の表の姿と、それと対する裏の姿を描く本作品の構造は、表と裏の生地が異なる「鯨帯」の特徴を活かしたものであると結論付けた。

第三章は、種彦が『田舎源氏』を創作する際、『源氏物語』の筋や年立、挿絵をどのように取り扱っているのかを論じたものである。第一節では、『湖月抄』薄雲巻から藤袴巻までの諸注を抜粋した種彦の自筆稿本『柳亭雑集』^{りゅうていざつしゅう}の検討を通して、種彦が『源氏物語』を読む際、指示する対象が不明瞭な語、登場人物の人物関係、年齢などに注目していたことを指摘した。また、『柳亭雑集』には乙女巻と玉鬘巻における同時期の出来事に関する種彦の覚書があるが、それは『田舎源氏』において、両巻の出来事を時間順に並べ替えて翻案する際の基準として利用されていたことを論じた。第二節では、『田舎源氏』の光氏の年齢は、基本的に『源氏物語』の新年立を踏まえていることを明らかにした。また、『源氏物語』の巻順と物語の時間の流れが一致しない場合、種彦は巻の順序を入れ替えて、物語の出来事を時間順に並べていることを考察した。また、賢木巻の桐壺院崩御が、賢木巻の他の出来事より後の編で翻案されたのは、歴史的な出来事を作中に反映させるための種彦の工夫であったことを述べた。第三節では、山本春正編『絵入源氏物語』^{やまもとしゅんしょう}(以下、『絵入源氏』と略す)の図様が『田舎源氏』の挿絵に大きく影

響を与えているという従来の指摘を、新しい例を用いて補強した。そして、種彦は『絵入源氏』の図様を利用する際、それをそのまま『田舎源氏』の挿絵として用いず、元々なかった人物を描き加えたり、登場人物の感情がより伝わるように構図を変えたりする工夫を凝らしていたことを新たに指摘した。また、『田舎源氏』では、近世初期の絵入り版本の図様とは異なる挿絵も見られるが、このような新しい図様が作られたのは、(1)種彦が『湖月抄』の諸注や『源氏物語玉の小櫛』を参照して『源氏物語』の本文考証を行い、その結果を挿絵に反映させたこと、(2)話の舞台の再利用を避けるため、原作とは違う場面に描いたことによることを明らかにした。

以上の考察を通じて、考証趣味の見られる作品だけでなく、演劇との関わりが強い作品や『田舎源氏』も、種彦の精密な調査と研究に基づいていることが確認できた。戯作者でありながら、常に様々な資料に接し、関心を持った事柄を考証し続け、その結果を積極的に合巻に取り入れることが、種彦独自の創作態度であることを明らかにした。